

ビアマン＝シュミットによる「マンハッタンのインデアン」の検証 Examination on “Manhattan Indian” of Bierman and Smidt

竹 森 一 正*

Kazumasa TAKEMORI

1. ビアマン＝シュミット教授の記述

ハロルド・ビアマン＝セイモア・シュミット教授は、1960年に『資本予算管理の意思決定』を著した。この冒頭にいわゆる「マンハッタンのインデアン」の話がプロローグとして記載されている¹⁾。染谷＝鎌田訳による当該部分は次のとおりである²⁾。

「24ドルでマンハッタンを売ったインデアンは、抜け目のないセールスマンであった。もし彼がその24ドルを6パーセントの半年複利で投資したとすれば、現在では95億ドルになっており、今や改良された土地を大部分買いもどせるわけである。」

今やこの話はわが国において管理会計を学ぶ学生にも教える教師側にもすっかり有名になり、管理会計の体系も掴みきれていない、勉強を始めたばかりの学生諸君にとってさえまるで知己のような存在となった。資本予算という管理会計領域にこのような日常的でかつ意外性ある知識から入っていくことは初学者にとっては好ましいことであるから、このプロローグが普及することは喜ばしいことである。

情報が孫引からそのまた孫引の曾孫（ヒマゴ）引、そしてそのまた孫引と代を重ねていくうちに情報が一人歩きを始め、ついにはオリジナルのものとは似ても似つかぬものとなることがよくあるが、教育に携わる者としてそうあってはならないことを常に自覚したい。伝承であっても話は正確であればこれに越したことはない。まして、このマンハッタンのインディアンの話は、わずか30年ほど前の出版物のものであるから、正確な記述を原点を確認して教育に役立てることは非常に重要なことと思う。しかし、この原点を確かめた人は稀であり、むしろどのようにしても発見できないという方が多い。おかげさというならば、現代会計学史研究上の謎となっている。以下は、この謎に挑んであきらめてしまっている先生方に参考になればと、紹介するものである。

2. S・ブランチ・ウォーカー氏の記述

1959年8月、コネチカット州スタムフォード市にすむS・ブランチ・ウォーカー氏（S. Branch Walker, Stamford, Connecticut）は、『ライフ』誌に投書をした。文面は次のとおりであった³⁾。

The Indian who sold Manhattan for \$24.00 was a sharp salesman. If he had put his \$24 away at 6% compound semiannually, it would

*経営情報学科 一 会計

Department of Business Administration and
Information Science - Accounting

now be 9.5 billion and could buy most of the now-improved land back.

この短い文章が全文である。当然ながらこれは論文ではない。また文献という程のものでもないだろう。掲載したのが写真雑誌『ライフ』であるから、そこに論文があるはずはない。これは、投書(“LETTERS TO THE EDITORS”)である。この文章を掲載している第6頁は投書欄の頁であり、他に19名の投書を見ることができる。全員がアメリカ本土内のアメリカ人(らしい名字の人々)である。投書は、8月10日号の記事別に分類されている。すなわち、読者は記事について感想や希望やコメントなどの投書をし、それを記事種類別に分類掲載している。この8月31日号では、「楽しみのために落ちる(FALLS FOR FUN)」、「若い企業家達(YOUNG ENTREPRENEURS)」、「ロシアでの副大統領(VICE PRESIDENT IN RUSSIA)」、「社説(EDITORIAL)」、「より新しいニューヨーク(A NEWER NEW YORK)」、「シェイクスピア崇拜者(BARDOLATRIE)」、「テレビの驚くべきいなか者(TV'S REMARKABLE RUBE)」および「世界の週の一瞥(A LOOK AT THE WORLD'S WEEK)」の8分類が行われている。ウォーカー氏の投書は、特集「より新しいニューヨーク」について、K・B・キーティング上院議員およびD・E・ソープ氏に次いで3番目に掲載されている。また、この投書欄では編集部からの返事を同時に掲載しているものもある。ウォーカー氏の文章の左には、タイプ作業中のルイス・コーエン編集員と発行者カッセル氏の写真が掲載されている。

3. 『ライフ』の発行形態

『ライフ』には国内版と国際版があることを知らねばならない。ハワイを含むアメリカ本土内で発行されるのが国内版である(『ライフ』は特に国内版としているのではなく、単なる『ライフ』が結果的に国内版である)。わが国で販売された『ライフ』は国際版(International edition)であり、表紙に国際版

が明記されている。国際版には、国内版の約1月遅れで更に国際版用に少々の変更変更を行った記事内容が掲載されている。また、投書欄はこの1月遅れの国際版の記事についてアメリカ人以外の外国人による投書が掲載されている。

国会図書館などのわが国の図書館に収納されている『ライフ』もこの例外ではなく国際版であるから、どのように調べてもウォーカー氏の「マンハッタンのインディアン」は発見できない(悪いことに国会図書館の『ライフ』1959年8月31日号は欠号である)。

ウォーカー氏の投書は以上の理由からアメリカ国内の図書館でなければ見ることができない。筆者は、カリフォルニア州サンフランシスコ市郊外のバークレイ市立図書館(The Berkeley Public Library)でこの『ライフ』を閲覧しウォーカー氏の投書を発見することができた。蛇足ながら、筆者はここで話題となっているマンハッタンの中にあるニューヨーク市立図書館(The New York Public Library)でも同誌の所蔵を確認している。

4. 特集「より新しいニューヨーク」

アメリカ国内版の『ライフ』1959年8月10日号⁴⁾はA4版の雑誌であり、表紙は4人の中年の白人女性である。表紙下にある説明では左から、ミコヤン婦人、ニクソン婦人、フルシチョフ婦人およびコズイレフ婦人となっている。彼女達の夫の地位や立場を考えればこれは大変な豪華顔合わせである。

本号の特集がドミトリ・ケッセル=ファレル・グレハムの写真による「写真随筆、より新しいニューヨーク：巨人建設ブームが偉大な都市の新しい顔をさらけ出す」である。この特集は、再開発により高層ビルの都市へと変貌するニューヨーク(マンハッタン地区)を12.5頁にわたって12枚の写真と平均23語の11の説明文で取り上げている。美しい高層ビルのスカイラインの写真、民家の壁が途中から削り取られたビル工事現場の写真、広い更地となった空地に1軒だけ残った小さな民家の写真、巨大な崖かと思わ

せる地下部分の掘削工事の写真などの変貌するニューヨークの写真が掲載されている。ただし、これら一連の写真はすべてカラー写真ではなく、白黒写真に着色しただけの擬似的なカラー写真であることは驚きである。当時の世界の写真家にとって報道写真やドキュメンタリー写真の先生のような位置付けにあった雑誌であるにもかかわらず、完全なカラー写真は撮影されていなかったことになる。しかし、この雑誌のどこにもインデアンから\$24相当でマンハッタンを手に入れたという文章はない。

5. ウォーカー氏の投書

ウォーカー氏はこの『ライフ』1959年8月10日号のニューヨーク特集を見て、史上最大の不動産バーゲンと言われるマンハッタン島の譲渡の話を書き出し、エッセイのような投書をしたことになる。同氏はこの\$24全額を6%半年複利で投資をしたと想定して元利合計の計算をしたと考えることができる。その結果得た金額は、高層ビルが林立する1959年当時のマンハッタン島を建物込みで十分に買い戻せる額であったのであろう。

コネチカット州スタムフォード市はニューヨークへ自動車、バスまたは鉄道で1時間弱の場所であるから通勤圏内にある。また、同市は連邦会計基準審議会（FASB）がある所でも有名である。スタムフォードと似た地名に、スタンフォード大学があるカリフォルニア州スタンフォード（Stanford, California）があり、わが国ではこちらの方がはるかに有名である。しかし、同大学の所在はわが国流に表せば「カリフォルニア州パロ・アルト市スタンフォード町」である。スタムフォードをスタンフォードと誤記すると、スタンフォード大学の大学名があまりにも有名であるから大学の関係者かとの誤解も誘発しかねず、このムとンは厳重に区別すべきであろう（前述の染谷＝鎌田訳ではスタンホードとされている）。スタンフォード市というのも実在するが、こちらは全米で一つだけ、ケンタッキー州の中央にある。位置はイリノイ州シカ

ゴ市から南東へ301マイル（484km）、テネシー州ナッシュビル市から北東へ126マイル（203km）の距離であるから、「スタンフォード市の・・・」などと言ってしまうととんでもない見当違いの都市名を口にしていることになる。

S. Branch Walker の氏名は、「財務・会計雑誌論文データベース」（日本書籍貿易株式会社）、『アメリカ会計学会名簿』、カリフォルニア大学検索システム「メルビル」およびアメリカ議会図書館検索システム「ローキス」のいずれでも検索できない。従って、学者でもないし著書を著した実績のある実務家でもない。超長期の複利計算をする計算能力を持つ経理マンと見るのが妥当な所であろうか。従って、「ウォーカー教授による」とするのは行き過ぎの表現である。

6. 『ライフ』1959年8月31日号

前述したようにウォーカー氏の投書は『ライフ』国内版の1959年8月31日号にある。これをビアマン教授またはシュミット教授のいずれかが見つけて「面白いから冒頭のプロローグにしよう」となったのであろう。しかし、1960年出版の著書であるから書き始めは2年前の1958年位になる。これでは時間的に合わないから執筆中に見つけたことになる。多忙を極める教授がわざわざ写真雑誌『ライフ』を見ていて、その投書欄まで目を通していたことになる。秘書に任せたのではこのような細かい部分には却って目が届かないはずである。なぜ、この投書が著書の冒頭のプロローグとして取り上げられたかの謎が残る。学会では有名な教授ではあっても案外家庭では平均的アメリカ人であり、奥さんと一緒に『ライフ』でも見ていたのかも知れない。

『ライフ』同号（Vol.47, No.9）は、リップバンウィングルの幻想的表紙であり、特集は「注目すべきアメリカの新シリーズ：アメリカの伝説」である。8月10日号と本号との間には、8月17日と8月24日号があるから、その間が編集期間であることになる。しかし、わが国で見

ることができる国際版の『ライフ』1959年8月31日号は、表紙が赤十字マークを付けて白く塗装された軽空母と病院船と駆逐艦らしい米海軍の艦船の絵である。この号の特集は「平和への大胆提案：新しい種類の偉大な白い艦隊」である。この表紙と同じ艦隊の絵を掲げている国内版は、1959年7月24日号（Vol.47, No.4）である。すなわち、国際版は1月遅れで配本されていることになる。娯楽半分、報道半分の写真雑誌であり、現在よりもはるかに政治も経済もゆっくりと動いていたからこそ、このようなノンビリしたことができたのであろう。

7. 「マンハッタンのインディアン」の検証と背景

ウォーカー氏の話は本当であろうか。史実は、1626年夏にオランダ人入植者の総督ウィリアム・ヴェアフルストがカナジ族インディアンから60ギルダー（約US\$24相当）の物品と引換えにマンハッタン島を譲り受けたということである。1626年に\$24の現金をもらい、その後一切金利の引出しをしないで6%の金利で1959年まで1年複利で貯蓄していたと仮定して、次の計算をしてみる。

$24 \times (1 + 0.06)^{333} = 64$ （億ドル、邦貨幣算約6,400億円）

この金額でならウォーカー氏の計算結果よりも少ないが本当にニューヨークのマンハッタン島地区を建物や道路・地下鉄などを込みで買い戻せるのであろう。ニューヨークで不動産業務に携わった経験がある方がおられれば、その1950年代後半時点でのこの話の真偽をお聞きしてみたいものである。

しかし、私はこの話に似た映画を見た記憶がある。1970年代の前半（昭和40年代後半）のわが国のTVの深夜放送であるが、かなり古い白黒のアメリカの映画である。何かのきっかけで古いアメリカ国債が、自分の先祖のものだと分かった若者が億万長者になる話だったと記憶しているが、その国債の発行時点から現在までの元利合計を計算するシーンが印象的であった。10人ほどの男女が、手回し式の計算器や会計機

を操作し、管理者らしい男性は帳簿を付けて徹夜で計算するのである。それが何とも楽しい喜劇として描かれていた。題名も出演者も忘れてしまったが、どなたかアメリカ映画の活き字引を自任している方がおられれば、ぜひとも確かめたい内容である。

所変われば品変わる、である。アメリカの関数電卓やプログラム電卓には、正味現在価値計算やキャッシュフロー計算用のキーがかなり初期の頃から標準装備されているのが一般である。それだけ投資と金利に対する感覚がわが国におけるのとはかなり違うことを感ぜざるを得ない。このような金利を投資活動の中心の一つに置く風土の中で、しかも有色人種や少数民族への配慮もアメリカ・インディアンへの歴史的反省もない白人優位の時代にあって、一種のシャレとして「マンハッタンのインディアン」が出てきたと想像するのである。（なお、白人が現地原住民に酒を飲ませて酔わせてしまい、契約書にサインさせるというやり方は、最近まで続いていた土地租借や土地授受の際の常套手段であった。）

8. むすび—現代会計学史研究

1960年に同上書の初版を出版した当時のビAMAN=シュミット両氏は共に、コーネル大学の准教授であった。この年は、J・ディーンの『資本予算管理（Capital Budgeting）』が出版されて10年目に当たり、同書により新しい会計概念として衝撃を与えた資本予算が実務界にも学会にも普及した頃に当たる。新進気鋭の管理会計学者としてのデビュー作にふさわしく、管理会計における資金概念を中心として著したこと、またJ・ディーンが資本予算の概念の解説を中心としたのに対して具体的に計算例を示しながらの展開としたことが前掲同上書の特徴となった。11年後に出版された第3版では両氏共に教授となり、その後の順調な生活ぶりが伺える昇格である。初版がハードカバーであるにもかかわらず、第3版はペーパーバックであり、教科書としての普及を示している。

ビAMAN=シュミット著『資本予算管理の意

思決定』は、今日でも内容が色あせることはない。むしろ、日米の管理会計実務の紹介や解釈が主流となっている昨今の管理会計研究の中で、かえって新鮮な感じを受ける。現代会計学史という分野が今後展開されるならば、昨日を見て今日を考えるという歴史研究の命題にあうように意義を発揮するかもしれない。

そのような会計学の研究領域が確立した時、考古学研究者達の発掘作業に相当する検証対象の一つが、ピアマン＝シュミット著同上書の冒頭を飾るウォーカー氏の投書記事である。マンハッタン島譲渡の歴史なら、エンパイア・ステート・ビルディングの展示室資料の引用でもよいし、マンハッタン島の歴史本なら多数ある。また、歴史上の無茶苦茶な不動産取引と複利計算を事例とするなら、ロシアからのアラスカ買収でもよかった。この類の話は他にもいくらでもある。

ほんのきまぐれのように『ライフ』への短い投書をし、それをまた、きまぐれのように両准教授が引用したことから、ウォーカー氏は会計学研究に名を残す謎の人物となったのである。

注 1. Harold Bierman, Jr. and Seymour Smidt, *The Capital Budgeting Decision*, New York, NY: The Macmillan Company, 1960.

ア. 原書第 1 版では、このプロローグは、本文第 1 頁の前の中扉に本文の活字ポイントの約 1.5 倍の大きさのポイントのイタリック体で記述されている。また、同第 1 版はハードカバーであり、構成は参考文献目録を含む 195 頁、付録 45 頁、索引 4 ページの計 246 頁である。しかし、1971 年に出版された第 3 版では、書名が『資本予算管理の意思決定——投資プロジェクトの経済分析と財務管理』(*Capital Budgeting Decision: Economic Analysis and Financing of Investment Project*) と副題付きとなった。プロローグは本文第 1 頁の冒頭に本文の約 80% 位の小さなポイントのイタリック体の活字で、いわば格下げの扱いになった。その分、本を開いてこのプロローグを目にする時のインパクトは小さくなった。また同版は、ペーパーバックであり、構成は参考文献目録を含む 421

頁、付録 45 頁、索引 10 頁の計 482 頁となっている。

イ. 第 1 版は、13 章の構成であったが、第 3 版では、3 部、21 章の構成となり、各部と各章の冒頭に次のようなプロローグが置かれた。(カッコ内は同上書第 3 版の頁)。

第 I 部……『ライフ』1959 年 8 月 31 日号の投書「マンハッタンのインデアン」(p.1)

第 1 章……『ニューヨーク・タイムズ』1964 年 1 月 17 日の記事 (p.3)

第 2 章……J・A・シュンペーター著『資本主義、社会主義、民主主義』からの引用 (p.38)

第 4 章……アービング・フィッシャー著『利子論』からの引用 (p.62)

第 5 章……クヌート・ウィクセル著『政治経済学講義』からの引用 (p.74)

第 6 章……J・R・ヒックスの論文「不確実性と利益の理論」からの引用 (p.107)

第 7 章……ベンジャミン・フランクリンにかこつけた小話 (p.122)

第 II 部……「アノンの小話」(p.141)

第 8 章……ピエール・マッセ著『最適投資意思決定』からの引用 (p.143)

第 9 章……ベーム・バウエルク著『資本と利子』からの引用 (p.151)

第 10 章……J・M・ケインズ著『雇用・利子及び貨幣に関する一般理論』からの引用 (p.182)

第 11 章……J・M・ケインズ著同上書からの引用 (p.195)

第 12 章……J・M・ケインズ著同上書からの引用 (p.214)

第 13 章……J・ハーシュライファ＝J・C・デヘイブ＝J・W・ミリマン著『水の供給・経済学・技術及び政策』からの引用 (p.232)

第 14 章……ジョエル・カゼール稿「シカゴ大学経営大学院ニューズレター (1969 年 8 月号) より」からの引用 (p.256)

第 15 章……『ニューヨーク・タイムズ』1964 年 1 月 17 日のジェリー・M・フリントによる記事 (p.268)

第 16 章……ジョセフ・A・シュンペーター著『経済発展の理論』からの引用 (p.278)

第Ⅲ部……ダンテ・アリギェリ著『神性喜劇』からの引用 (p.295)

第17章……ロバート・ドーフマン著『水資源システム設計』からの引用 (p.297)

第18章……ロバート・M・ソロー著『資本理論と資本利益率』からの引用 (p.327)

第19章……『毛沢東語録』からの引用 (p.344)

第20章……J・バレット著『親しい引用』訓話の引用 (372)

第21章……A・D・アレクサンドロフ＝A・N・コロモグロフ＝M・A・ラブレンドン著『数学』からの引用 (p.391)

ウ. 上記のエ. におけるクヌート・ウィクセル (第5章) は, 本来はヨハン・G・K・ウィクセル (Johan Gustaf Knut Wicksell) である。同氏およびベーム・バウエルク (第2章および第9章) の邦文表記は, 北野熊喜男 (キタノユキオ) 訳による。

エ. 第1版は, 鎌田信夫教授 (南山大学) の蔵書閲覧による。

注2. ビヤマン＝シュミット著・染谷恭次郎＝鎌田信夫訳『資本予算の決定方法』(ダイヤモンド社, 昭和37年) p.1。同訳書はタテ書きであり, 数字は漢数字で表記されている。

注3. Walker, S. Branch. "Letters to the Editor on 'A Newer New York'," the third letter, *Life*, Vol.47, No.9, August 24, 1959.

注4. *Life*, Vol.47, No.6, August 10, 1959.